

タカナ

冷涼好み多湿に適応

橋口 健一郎

タカナは中央アジアが原産と言われるアブラナ科の野菜でカラシナの一種です。日本へは平安時代に中国から導入され、かつては近畿地方まで栽培されていましたが、現在は主に九州各地で栽培されています。

一般に株が小型のものをカラシナ類、中型～大型のものをタカナ類と総称しています。特有のピリッとした辛み成分はマスタードなどと同じイソチオシアネートという成分で、食欲を増進させ、昔から漬物材料として重宝されています。緑黄色野菜としても栄養成分が豊富で、特に免疫力を高めてくれるβカロテンが豊富に含まれています。また、ビタミンCをはじめビタミンB類もバランスよくたくさん含んでいます。

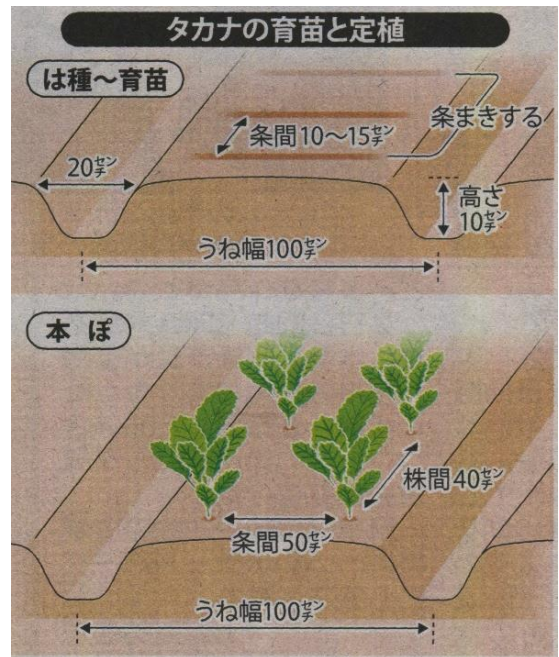
生育適温は15～20度で、冷涼な気候を好みます。土壌に対する適応性は広く、多湿に耐え、水田裏作に容易に導入できます。土壌酸度は中性に近い弱酸性が適しています。ここでは、漬物用の秋まき春どり移植栽培を紹介します。

播種期は9～10月です。播種の1週間前までに育苗床を準備します。1平方メートル当たり堆肥2キログラム、苦土石灰120グラム、化学肥料60グラム（チッ素、リン酸、カリ成分15%の場合）程度を施し、耕うん後、幅1メートル程度の床を作ります。条間10～15センチで浅い溝を切り、条播きします。うすく覆土して、かん水します。その後、本葉4枚頃までに2～3回にかけて間引きし、株間8センチ程度の一本立てにします。移植期は11～12月で、本葉6～8枚程度が適期です。

本ぼは排水が良く、日当たりの良い場所を準備します。1平方メートルに堆肥2キログラム、苦土石灰120グラム、化学肥料100グラム（チッ素、リン酸、カリ成分15%の場合）程度を施し、耕うんします。定植はうね幅1メートル、条間50センチ、株間40センチ程度で二条植えにします。定植前日にかん水し、できるだけ断根しないように採苗します。収穫までに、追肥と除草を兼ねて、中耕・培土を2～3回行います。追肥は1平方メートル当たり窒素・カリ肥料60グラム（成分16%の場合）程度を2～3回に分けて施用します。

収穫期は3～4月頃です。とう（抽だい）の長さが10センチ以上にならないうちに、できるだけ大株で収穫します。

（鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部野菜研究室長）



平成28年10月13日（木）／南日本新聞